

## カロス・タナトスとは何か：Tyrtaiosの戦死論<sup>1</sup>

吉 武 純 夫

### 《1.問題点》

カロス・タナトス(*kalos thanatos*)という概念は、5世紀から4世紀にかけて、悲劇、歴史記述、弁論、哲学とさまざまな分野において、戦死に限らずさまざまな死に適用されて盛んに用いられたが、元来は、戦死を称えるのに編出されたものである。死ぬまでの勇ましい戦いぶりが称えられることは容易に理解できるが、戦死自体は通常、何の益をもたらすものでもない。戦死そのものを肯定的に評価することは、ギリシア人にとっても容易にはできないことであった。一般兵卒の戦死も無価値なものではない、とする考え方は、Homerusの中にもおぼろげに窺うことはできるが、その口調はきっぱりとしたものではなかった<sup>2</sup>。Hektorの英雄的な戦死を *eukleios* と修飾した *Il.22.110* を除けば、死そのものに対してははっきりとした言葉で肯定評価を与えたのは、現存テキストでは7世紀後半のTyrtaiosが最初である。彼は、通常は「美しい」という意味を表すカロスという語を使うことにより、それを可能にしたのである。

Tyrtaiosは、Fr.10(West)の1-2行で、「*agathos*なる(善き)男が、祖国のために前線で戦いながら倒れて死ぬことはカロン(カロス)である」と言う<sup>3</sup>。また27-30行では、若い兵士は、生きているときも人々の称賛と憧れの的であるが、「前線で斃れたならばカロスになる」と言う。これらは衝撃的な申し立てであった<sup>4</sup>。それは、一般兵卒の死の意義がはっきりと肯定された最初だからだともいえるが、それはまた、カロスという語が持つ官能的<sup>5</sup>な響きや、視覚に直接訴えてエロスを掻き立て感動と称賛をもたらす一とPlatonの言う一強烈なアピールを含意するものであるこの語が使われていることの、意外性によるものでもあろう。このことはきわめて重要である。なぜならば、TyrtaiosはHomerusの言語で書いているわけだが、Homerusにおいては、カロスの語は、官能的に捉えられる対象を修飾する時以外は、特段の素晴らしさを伝えるものではなく、いわゆる「倫理的に美しい」という称賛を直接に表すことはなかった、と考えられるからである(下の2節を見よ)。本論文が問うのは、Tyrtaiosは戦死を形容するのにどういう意味を込めてカロスという語を用いたのか、あるいは当時においてそれはどういう意味を持ちえたのか、ということである。

この問題に対して、十分な説明がなされたことはこれまでなかった。たとえば、Fr.10では *aischron* という語の方に重点があるとし、カロスをその補足とししか認めず、この語が何か独自の主張を展開しているとは認めないという態度があった<sup>6</sup>。あるいは、LSJギリシア語レキシコ

ンのカロスの記事第3項のように<sup>7</sup>、この語には「倫理的に美しい」という意味が Homeros の時代からあったとして、この語の官能的なニュアンスには目を向けずに、倫理的な称賛を直接に汲み取るだけで済ませてしまう態度があった。確かに、Aristoteles は、ポリスや他人のためになされることは何であれ「カロス」であると主張した<sup>8</sup>。LSJ の第3項は、古典期の用例については正しいと思われる。しかし、Homeros の例においては必ずしも正しくないだろう。Homeros からまだ遠くない時期に、Homeros の言語を踏襲して使用した Tyrtaios において、戦死が倫理的に美しいという捉え方がすんなりなされたとは考えにくい。Tyrtaios が美意識にも訴えているのだ指摘する人たちはあるが、彼らも、それが具体的にどういうことなのかについては説明せず、視覚的なものと倫理的なものの区別は無かったという話以上には進まないのが通例であった<sup>9</sup>。結局、カロスという言葉で、何に対してどういう称賛を行っているのか、はっきりしないのである。Vernant だけは、*Il.22.73* の *panta kala* という句について深遠な考察をめぐらした。それは、若さを漲らせて戦った兵士の死体には、若さの輝きが死後も続く、また、死体の血や傷が、彼の勇敢な戦いぶりを思い起こさせるといふさまが美しいのだ、という主旨の説明であったが<sup>10</sup>、Tyrtaios のカロス・タナトスについてもこれを特に改めることはしない。彼の議論は、大いに真実を含んでいるが、Homeros の *panta kala* についても、Tyrtaios のカロス・タナトスについても、該当テキストに密着して説明しているわけではなく、またカロスという語の意味を吟味することもない。それゆえ、Tyrtaios において死自体がカロスだというのはどういうことなのか、なぜ兵士は死ぬことによってカロスになるのか、ということは結局教えてくれない。Loraux(1977)も、スパルタ人の戦死のモラルに大きな光を当てたが、死がカロスだとはどういうことなのかについては論じていない。

戦死をカロスだとするとき、何らかの肯定評価がなされているということは漠然と分る。しかし、カロスという語は称賛を表す時には対象を選ぶ、という事情があったのなら、そもそも、Tyrtaios は戦死をいかなるものと捉えてカロスだと言ったのかということまで問い直さなくては、この修飾にこめられた意味合いをつかみとることはできない。これらの事情を探るために、まず、Homeros の時代におけるカロスという語の用法を調べてみることから始める必要がある。

## 《2.Homeros の用法にもとづくカロスの意味(1):カロスが卓越性を表す場合と表さない場合》

私のカウントが正しければ、Homeros の両叙事詩の中には、形容詞カロス(*kalos*)の使用例<sup>11</sup>が全部で324件(*Il.*に147件、*Od.*に177件)ある。この語は、人物や物体を修飾している用例<sup>12</sup>—それは *Ilias* に134件、*Odysseia* に147件あり、カロスの全使用例の大半を占めているわけであるが—においては、否定詞と共に用いられることはない。外貌等における卓越性を肯定するために使われているのが通例である<sup>13</sup>。

しかし、この語がそれ以外の対象、すなわち行為・事象を修飾する場合は様子がやや違っている。というのは、これに該当する43件(*Il.*に13件、*Od.*に30件)の全体を眺めてみると、カロスの語が行為・事象について何らかの卓越性を表そうとしていると考えられる用例は、たいていこの語が官能的に捉えることのできる性質の行為・事象を修飾しているケースであり、他方、この語が官能的に捉えることのできない性質の行為・事象を修飾している用例は、たいてい卓越性を表そうとしたものではない、ということができるからである。詳細に見るならば、次のような事実が挙げられる。

- ① まず、全43件のうち、この語が行為・事象を、原級または最上級の形で絶対的に肯定して修飾している用例は22件(*Il.*に7件、*Od.*に15件)あるが、このうちの18件(*Il.*に4件、*Od.*に14件)は、官能的に捉えられる性質の行為・事象(音楽、声、食事など)をカロスが修飾したものである<sup>14</sup>。たとえば、*Il.*1.473(アカイアの戦士たちが歌って Apollon 神を喜ばせたとされる歌)や、*Od.*1.370(「その声神にも劣らぬ名手の歌を聴くこと」)などは、秀でた歌唱やそれを聴く楽しみの絶対的な卓越性を表しているということは明らかである。その他の例も、何らかの卓越性、素晴らしさを表すものであるということに疑う必要はないであろう。
- ② しかるに、行為・事象のうち、官能的には捉えられない性質のものをカロスが修飾している場合は、25件(*Il.*に9件、*Od.*に16件)あるのだが、そのうちの21件の例(*Il.*に6件、*Od.*に15件)においては、カロスの原級が否定詞を伴って使われているか、あるいは比較級の形により、ただ相対的にカロスか否かが云々されているかのどちらかである。このとき、カロスでない、と否定されている場合は、行為・事象が「特段に善いわけではない」という状態を表すものではなく、いずれも、好ましくない(悪い)という状態を表すものであった<sup>15</sup>。例えば、*Il.*6.326(δαιμόνι' οὐ μὲν καλὰ χόλον τόνδ' ἔνθεο θυμῶ,)も、*Od.*8.166(ξεῖν', οὐ καλὸν ἔειπες· ἀτασθάλῳ ἀνδρὶ ἔοικας.)も、あきらかに非難の言葉である。また、比較級を用いた、よりカロスだという肯定は、いずれも、しようと思えばすぐに実現できる簡単な軽い行為を推奨するときに語られているのであり、しかも何らかの好ましくない事態を想定し、それよりも好ましいということを表すまでで、やはり卓越性を絶対的に表すようなものではなかった<sup>16</sup>。例えば、*Od.*3.69-70 (νῦν δὴ κάλλιον ἔστι μεταλλῆσαι καὶ ἐρέσθαι / ξείνους, οἳ τινές εἰσιν, ἐπεὶ τάρπησαν ἐδωδῆς.)は、客人 Telemachosに素性を尋ねることは今なら失礼ではないだろう、ということに過ぎないし、また、*Od.*3.357-58 (σοὶ δὲ ἔοικε / Τηλέμαχον πείθεσθαι, ἐπεὶ πολὺ κάλλιον οὕτω.)は、TelemachosがNestorの勧めに従って屋敷に泊まってゆくことを、そうしないよりは好ましいというに過ぎない。*Od.*6.39-40 (καὶ δὲ σοὶ ᾧδ' αὐτῇ πολὺ κάλλιον ἢ ἐπόδεσιν / ἔρχεσθαι.)は、Nausikaaが街外れの洗濯場まで行くには、歩くより馬車で行くほうがよいということに過ぎないし、*Od.*8.542-43 (ἀλλ' ἄγ' ὁ μὲν σχεθέτω, ἴν' ὁμῶς τερπώμεθα πάντες, / ξεινοδόκοι καὶ ξεῖνος, ἐπεὶ πολὺ κάλλιον οὕτω.)は、皆が楽しめるようにする方が、Demodokosの歌を聴いてOdysseusが悲しむよりはよい、ということである。

以上の2点の事実から推定されるのは、通例カロスの語は、官能的に捉えられる対象—それが物質的であるにせよ非物質的であるにせよ—に対しては卓越性を肯定しうるものであり、官能的に捉えられない対象に対しては、卓越性を肯定するために使われる言葉ではなかった、ということである。ここで問題として残るのは、②で21件に含まれなかった4件、すなわち、官能的に捉えられる性質のものではない行為・事象であるのに、それがカロスだと肯定されている場合は、どういう好ましさが表されているのか、ということである。これらについては、次のように考えることができる。

③ まず、*II.19.79-80*(ἔστατος μὲν καλὸν ἀκούειν, οὐδὲ ἔοικεν / ὑββάλλειν)は、集会の中で立って弁ずる者がいる時には、周りの者は口を挿まずに耳を傾けるべきだ、という主張である。ここでカロスによって示されているのは、そうでなくてはならない、あって然るべきという状態であって、特段に素晴らしい状態のことではない。意味は適合を表す *eoike* と同じであろう。次に、*II.9.613-15*(οὐδέ τί σε χρὴ / τὸν φιλέειν, ἵνα μὴ μοι ἀπέχθῃαι φιλέοντι. / καλὸν τοι σὺν ἐμοὶ τὸν κήδειν ὅς κ' ἐμὲ κήδη)では、「私」と一緒になって敵を苦しめることはカロスだ、ということが、「汝にとって」と付言されていることが重要である。それは、私と友でいたいのなら、私の敵に親切にしてはならないという前言の言換えであり、これはギリシア人の常識的な倫理でもあった<sup>17</sup>。このカロスもやはり、そうするのがいかに素晴らしいかを表すというよりも、友たる者に相応しい行為は何か、という標準を表すものなのである。いっぽう *II.24.388* (ὡς μοι καλὰ τὸν οἶτον ἀπότμου παιδὸς ἐνισπες.)は、Hermes が Priamos の心情に沿うようにして Hektor の戦死をぴたりと言い当てたことを、Priamos が評したものである<sup>18</sup>。これらの3件に共通して言えることは、カロスは何かが何かに—それは行動規範にであったり、個人のなすべきことにであったり、真実にであったりするのだが—「ぴたりと当てはまっている様子」を表している、ということである<sup>19</sup>。それは、妥当という線を越えて卓越している、特段に好ましい、という状態を表すこととは異なる。

では、このことをふまえて、最後に残る一件である *Od.17.397*(Ἀντίνο', ἧ μὲν καλὰ πατὴρ ὡς κήδειαι υἱός,)を見てみよう。ここで Telemachos が言っているのは、Antinoos は、館の財産の消耗に気を揉むことによって、「私」のことに気を揉んでいるが、それはちょうど、息子 のことに気を揉む父親のようだ、ということである。では、その様子がカロスだとはどういうことだろうか。これは「卓越した親切さだ」と皮肉的に言っているのだ、とする解釈があることは事実である<sup>20</sup>。しかし、ここでカロスという言葉は本当に「好ましさ」を表しているといえるだろうか。ここで取上げられているのが Antinoos の心配振りであることを考えると、ここに何らかの卓越を見ることは不自然に思われる。しかるに、ここでもカロスは、彼の心配ぶりと父がするであろう心配との間の、ぴたりとした適合のもとで語られており、この点において、先の3例のパタンに一致しているのである。このことに注目するならば、このカロスは、「父親が息子のことに気を揉むように」を強調するものだと言える。心配ぶりが優れているとすれば、

それは父のそれに準ずるからである。以上のことから、官能的に捉えられない行為・事象をカロスが修飾する時は、特に基準の提示がない限りは、それが標準的なありさまに合致していることを表すものであって、特段の好ましさを表すものではなかったと判断される。

この節の議論から得られるのは、次のような結論である。Homerós においては、カロスの語は、基本的には、官能的に捕らえられる対象に対しては、標準を超えた卓越性を肯定する力を持ちえたが、官能的に捕らえられない対象に対しては、その限りではなかった。これは、LSJ が第 3 項として掲げる「倫理的に美しい、優れている」('beautiful, noble, honourable in a moral sense') という意味が、Homerós の時代に確立していたとは言えないということの意味する<sup>21</sup>。

あるものが内面的にカロスであるということは、その外貌に左右されるものではない、と主張したのは Platon である<sup>22</sup>。しかし、その彼も、カロスなるものは「最も鋭敏な感覚である視覚」に訴える時に最も鋭く感得され、エロースを掻き立てるものだ、という認識を *Phaedrus* や *Symposium* において繰り返し語っているのである<sup>23</sup>。古典期にはカロスという語がさまざまな意味で使われるようになっていたということは事実である<sup>24</sup>。しかし、Sappho, Fr.50.1 (L-P): ὁ μὲν γὰρ κάλος ὄσσον ἴδην πέλεται <κάλος> (「カロスなる人は、姿形に関する限りにおいて、カロスなのだ」) から分るように、視覚に訴えるものを修飾することが、この語の本来のあり方なのであった<sup>25</sup>。カロスという語が持つ最も強い称賛の力は、官能的に捉えられる対象に対してこそ有効だったのである<sup>26</sup>。

### 《3.Tyrtaios, Fr.10 の構成におけるカロス》

カロスの意味の詳細に踏み込む前に、以上のことを踏まえて、Tyrtaios, Fr.10 の 2 箇所にあるカロスの語が、何らかの卓越に対する称賛を表したものであるのかどうかということを、この詩の構成と考え合わせてみよう。その全テキストを次に掲げる。

τεθνάμεναι γὰρ καλὸν ἐνὶ προμάχοισι πεσόντα  
 ἄνδρ' ἀγαθὸν περὶ ἧι πατρίδι μαρνάμενον·  
 τὴν δ' αὐτοῦ προλιπόντα πόλιν καὶ πίονας ἀγροὺς  
 πτωχεύειν πάντων ἔστ' ἀνιηρότατον,  
 πλαζόμενον σὺν μητρὶ φίλῃ καὶ πατρὶ γέροντι 5  
 παισὶ τε σὺν μικροῖς κουριδίῃ τ' ἀλόχῳι.  
 ἐχθρὸς μὲν γὰρ τοῖσι μετέσσειται οὐς κεν ἴκηται,  
 χρημοσύνη τ' εἰκῶν καὶ στυγερῇ πενήνῃ,  
 αἰσχύνει τε γένος, κατὰ δ' ἀγλαὸν εἶδος ἐλέγχει,  
 πᾶσα δ' ἀτιμὴ καὶ κακότης ἔπεται. 10

τειῖθ' οὕτως ἀνδρός τοι ἀλωμένου οὐδεμί' ὥρη  
 γίνεται οὐτ' αἰδῶς οὐτ' ὀπίσω γένεος.  
 θυμῶι γῆς πέρι τῆσδε μαχώμεθα καὶ περὶ παίδων  
 θνήσκωμεν ψυχῶν μηκέτι φειδόμενοι.  
 ὦ νέοι, ἀλλὰ μάχεσθε παρ' ἀλλήλοισι μένοντες, 15  
 μηδὲ φυγῆς αἰσχροῦς ἄρχετε μηδὲ φόβου,  
 ἀλλὰ μέγαν ποιεῖτε καὶ ἄλκιμον ἐν φρεσὶ θυμόν,  
 μηδὲ φιλοψυχεῖτ' ἀνδράσι μαρνάμενοι·  
 τοὺς δὲ παλαιότερους, ὧν οὐκέτι γούνατ' ἐλαφρά,  
 μὴ καταλείποντες φεύγετε, τοὺς γεραιούς. 20  
 αἰσχρὸν γὰρ δὴ τοῦτο, μετὰ προμάχοισι πεσόντα  
 κείσθαι πρόσθε νέων ἄνδρα παλαιότερον,  
 ἦδη λευκὸν ἔχοντα κάρη πολιόν τε γένειον,  
 θυμὸν ἀποπνεῖοντ' ἄλκιμον ἐν κονίηι,  
 αἱματόεντ' αἰδοῖα φίλαις ἐν χερσὶν ἔχοντα— 25  
αἰσχρὰ τὰ γ' ὀφθαλμοῖς καὶ νεμεσητὸν ἰδεῖν,  
 καὶ χροὰ γυμνωθέντα· νέοισι δὲ πάντ' ἐπέοικεν,  
 ὄφρ' ἐρατῆς ἦβης ἀγλαὸν ἄνθος ἔχηι,  
 ἀνδράσι μὲν θηητὸς ἰδεῖν, ἐρατὸς δὲ γυναιξὶ  
 ζωὸς ἑών, καλὸς δ' ἐν προμάχοισι πεσών. 30  
 ἀλλὰ τις εὖ διαβὰς μενέτω ποσὶν ἀμφοτέροισι  
 στηριχθεὶς ἐπὶ γῆς, χεῖλος ὁδοῦσι δακῶν. (Tyrtaios, Fr.10 West)

まず 30 行のカロスから考えてみるのが、議論を楽にするであろう。30 行のカロスが修飾しているのは、「前線で倒れた」という戦死者当人である。これはひとつのイメージを伴った、官能的に捉えうる対象であるから、このカ罗斯は、強い称賛を表すものである資格があるといえる。21 行からの文脈も重要である。ここでは、戦死者が、生きている若者と明確に対照されている。このことは、このパッセージが下敷きになっている *Il.22.71-73* と比較してみると、はっきりと見えてくる。

κείσοντ' ἐν προθύροισι. νέω δέ τε πάντ' ἐπέοικεν  
 ἄρηϊ κταμένω δεδαῖγμένω ὄξει χαλκῶ  
 κείσθαι· πάντα δὲ καλὰ θανόντι περὶ ὅτι φανήη· (*Il.22.71-73*)

ここでは、老プリアモスが、殺されて横たわる自身の情けない姿を思い描いた後に、若者が戦闘で斬殺され横たわっているという状況を取上げて、「すべてがよろしい」(71: *pant' epeoiken*)と言う。それを言った上で、「この死体のもとに見えるものはすべてカロスである」(73: *panta de kala*)と言う。つまり、*epeoiken* も *kala* も、一貫して死体を巡って言われていることなのである。これに対し Tyrtaios, Fr.10 では、「すべてがよろしい」(27: *pant' epeoiken*)とされているのは、若者全般をめぐる状況についてであり、まず、彼は生きている間に皆からちやほやされ愛される、ということが2行以上にわたって語られる。死んだ彼がカロスであるというのは、その後の30行でのことなのである。このようにして、戦死者は、愛すべき青春の華を抱き女たちからもエロスをさし向けられる存在たる、生きている若者をも、しのぐ存在として位置づけられた上で、カロスと修飾されているのである。だから、彼は、まさに Platon が *Phaedrus* で語る、エロスを掻き立てるようなタイプのカロスなるものとされている、ということは明らかである。

しかし、カロスがいかなる意の賛辞であるにせよ、なぜ彼は死んだ時にカロスとなるのか<sup>27</sup>、ということは、この文脈からは不明である。それを明らかにできる唯一の方法は、同じカロスの語を含む1-2行の文言に頼ることであろう。

というのも、1-2行もまた、兵士が前線上で戦いながら倒れて死ぬという、ほぼ同じイメージを添えながら、死をカロスだとしているからである。ここでかなり具体的なイメージが与えられていることは、Horatiusのよく知られた単純な一節(3.2.13: *dulce et decorum est pro patria mori* 「祖国のために死ぬのは、甘美で美しいことだ。’)と比較すれば一目瞭然であろう。II.15.496-97( οὐ οἱ ἀεικέες ἀμυνομένῳ περὶ πατρὸς / τεθνάμεν. )と比べてみても、*en promachois*および*pesonta*が加えられていることにより、Tyrtaiosの詩句の方がより入念なイメージ描写のなされているということが分る。従って、Fr.10の冒頭にあるカロスも、何らかの卓越性への称賛を表すものである資格を有すると見込まれる。もしここにイメージが添えられていなかったならば、カロスは、「あって然るべきだ」あるいは何かに「適合している」という意味で解されることになる。そして30行との対応も希薄となり、30行のカロスの真意を捉える道も閉ざされることになる。確かに、冒頭の1-2行を聞かされてすぐには、カロスが形容しているのは官能的に捉えられた対象で、それが表しているのは賛嘆であると判断することは難しいかもしれない。しかし、この詩が進行していくうちに、9行が外貌(*aglaon eidos*)を問題としていることや、21-27行の老兵の死体の描写(*leukon, polion, aischra ... ophthalmois, nemeseton idein*)、そして29行が若者の見映え(*theetos idein*)を指摘することなど、この詩全体が視覚的な要素を重用しているのを見ていくにつれて、この詩が少なからず外貌やイメージに関心を払うものであるということに気付かされるはずである。そうして、30行に至るならば、冒頭行のカロスは30行の結論を根拠づけるものであり、同じく強い称賛を表すものであったということが確信される。1-2行と30行のカロスは同じ意味を表して補完しあっていると考えられ、それでこそ、この詩には一貫した主



張を見ることができるのである<sup>28</sup>。そして、この微妙な関係は、この詩のリングコンポジションの効果を高めることになっているといえる<sup>29</sup>。

さらに、1-2行と30行の対応は、この詩の構成において重要な意味を持つ。確かに、3行からは、「生きながらえたとしても、家族を支えることができない」という本人にもおぞましき事態を教えるメッセージが12行まで長く続き(*anierotaton*, *aischunein*, *elenchein*, *atimia*, *kakotes*)、それが、懸命に戦うことへの勧告(13-15行)の前提になっている。3-12行のこの否定的アプローチを重視する *Luginbill* は、カロス・メッセージに重要性を認めようとし<sup>30</sup>。しかし、3-12行は、内容も言い回しも、言い古された比較的ありきたりなメッセージである<sup>31</sup>。否定的アプローチは、この詩の後半に入ってから、その大部分にわたる16-27行で続く(敗走の恥:16、年長者より後ろに立つことの禁止:21、斃れている老人の醜さ:21, 26)。しかし、これも言い古された、またはよく知られたありきたりなメッセージである。そもそも老人の死体を表した23-25行のみならず、19-27行全体が *Il.22.71-76* のもじりである。さらにまた、「踏み止まれ」(15, 30)ということも、*Ilias* で40回以上繰り返されている常套句である。重要なのは、30行でカロス・モチーフが再登場するということである。19行に始まる老人のモチーフは、「醜さ」(19-27)から「若者の魅力」(27-30)へ、そして「戦死者の美(カロス)」(30)へと移り変わって行くことにより、*Ilias* の当該パッセージのニュアンス —すなわち、老人を戦死させるべきではないということと、若者は若さゆえに美しいということ— を保持しながらも、「死んでこそカロスになる」という新たなメッセージへと繋がってゆくのである。

それらの、ありきたりで否定的なアプローチに依拠したメッセージを、冒頭と末尾から挟み込んでいるのが、肯定的で衝撃的な2つのカロス・パッセージである。*Tyrtaios*, *Fr.10* は、全体として、唾棄すべき振舞いを教えると同時に、称賛される振舞いを教えている。確かに、前者を示すことも、「命を懸けて戦う」という同じ目標への促しとして、少なからぬ効力を持つことは疑いない。しかし、この詩はそれだけに止まらず、「前線に踏み止まり、前向きに戦いながら死ぬ」ということが、どんなに人の目に訴えることであり、どんなにエロスを掻き立てるような魅力的なことなのかを示すという新しいアプローチによって、積極的な誘いかけを行っているのである。ここで、恥ずべき振舞い、おぞましき事態の示しは、魅力ある振舞いを引き立てる役割を果たしている。否定的アプローチの方が長大だからといって、そちらの方に眼目があるということにはならない。内容展開の仕方から言っても、この詩全体が勇戦への勧告の決め手としているのは、否定的アプローチではなく、肯定的アプローチの方なのである。そしてこの点こそが、この詩の独自性であり、また新しさだ、ともいえる。一般兵卒の戦死それ自体を直接に肯定評価するということは、*Homer* のみならず、*Tyrtaios* の他の詩とも異なる点である<sup>32</sup>。

ところで、*Fr.10* の冒頭行の *gar* は、13-14行に対する根拠としても<sup>33</sup>、また、30行に対する根拠としても通用するものとなっている<sup>34</sup>。14行でいったん1-2行が思い起こされると考え



ることには問題はないが、Fr.10が14行までと15行以降の2つの詩からなっているという説に従う必要はない<sup>35</sup>。この詩を引用したLykurgosのテキスト(*Leocr.*107)に従って、32の行すべてを合わせて1つの全体であると考えるのが妥当であろう<sup>36</sup>。

ここで参考になるのは、この詩が繰返し語られたとするGerberの見解である<sup>37</sup>。冒頭と末尾で戦死をカロスと言っていることは、ダ・カーポで読むことを思いつかせる。32行まで進んでから1行に戻るといった形でもおかしいことはないし、30行からまっすぐ1行に戻ると言うことを繰返したあとに、31-32行をコーダとするという形でも読めるだろう。この詩が反復することを前提に作られているとすれば、すなわち、冒頭行が、14行や30行や32行の後に語られるのだとすれば、冒頭行に*gar*があるということは、初回にこれを聞く場合にのみ奇妙であっても、繰返し以降はなんら奇妙ではない<sup>38</sup>。30行で兵士自体がカロスと修飾された直後に、1-2行が繰返されるならば、この詩を聞く者は、冒頭行のカロスが、30行を説明するものとしておおよそどういう意味で語られているのかを、より確実に聞き分けることができるであろう。描かれているイメージを官能的に捉えて、そこに特段のよきものを映し出しているのだ、と解すれば良いということが分る。

#### 《4. Homerosの用法にもとづくカロスの意味(2)：官能的な次元での卓越を表すだけか》

それでは、凄惨で悲痛なものに違いない戦死のイメージ(1行)および戦死者の外貌(30行)が、いったいどういう意味でカロスだとされているのか。この場合は、「視覚的な快を与える」という、カロスの最も平明な意味でだとは考えにくい。しかし、そのような戦死および戦死者について、特段により何ごとかが肯定されているのだとすれば、そのどういう点がどういう意味でよとされているのか。

ここで留意すべきことは、再び、Homerosにおけるカロスの語の用法である。すなわち、Homerosにおいては、カロスが官能的に捉えられる対象に対して強い称賛を表す場合であっても、それは必ずしも官能的な次元での称賛とは限らなかった、と考えられることである。この事実を理解するには、Homerosにおいて軍事的な対象がカロスとされているケースを考えてみるのがよい。

*Ilias*においては、カロスの変化形を含めた全用例のうちの少なからぬものが、軍事的な物(武器・要塞など：147件中46件<sup>39</sup>)と人物・神(AchilleusやAres神など：5件)について用いられている。これらは、いずれも視覚的な要素を持つ対象であるから、カロスは、それらの対象の官能的に感知しうる外貌を捉えて言われた賛辞である可能性がある。少なくとも、人物については、外貌を表すものと考えられてきた<sup>40</sup>。そのことを疑うべき理由はない。しかるにこれらの賛辞は、対象に内在する軍事的な卓越に対する賛辞と等しいものであると見込まれるのである。というのはまず、軍神Aresが、男神たちのうちで唯一カロスとされている(18.518および*Od.*8.310)<sup>41</sup>。こ

のことは、彼のカロスぶりがこの神の職掌に関係するものであることを示唆している。また、ギリシア軍随一の武人であるAchilleusがギリシア勢で最もカロスなる男とされている(2.674)。さらに、*Od.11.522*においても、Odysseusの目にした最もカロスな男とされているMemnonが、Antilochos<sup>42</sup>をも撃ち破り、Achilleusと戦うまで殺されない強力な戦士であった<sup>43</sup>。これらのことが示唆するのは、軍人がいかにカロスであるかは、いかに彼が軍人として優れているかの指標となっていたということである。このことは、神の血を受けた者たちだけに限ったことではない。神の血筋以外でも、カロスとされるBellerophon(6.156)はヘラクレス的英雄である。*Od.11.519-22*では、Memnonに次いで最もカロスであったとされるEurypylosは、Neoptolemosの討ち取った相手の筆頭に数えられている<sup>44</sup>。また、カロスであるAgamemnon(*Il.3.169*)も、11巻での活躍に示されるとおり、やはり強力な戦士である。これらの場合において、カロスという語は、彼らの外貌のありようを表しながら、彼らの軍事的な卓越性を示唆したものであると考えられる。ということは、この語は、軍事的内実のよさを裏打ちするような、特別な外貌を有していることを示すものだった、と考えられるのである。軍事的卓越性が「外貌における卓越性」と関連していることがある、という考え方は、カロスの代りに*eidōs*を用いてAchilleusとAiasの場合を表した*Il.17.279-80=Od.11.550-51* (Αἴας, ὃς περὶ μὲν εἶδος, περὶ δ' ἔργα τέτυκτο / τῶν ἄλλων Δαναῶν μετ' ἀμύμονα Πηλεΐωνα.) や *Od.11.469-70=Od.24.17-18* (Αἴαντός θ', ὃς ἄριστος ἔην εἶδός τε δέμας τε / τῶν ἄλλων Δαναῶν μετ' ἀμύμονα Πηλεΐωνα.)、Hektorの場合を表した *Il.17.142*からも窺い知ることができる<sup>45</sup>。

この解し方が正しければ、武具や城壁等をカロスだという場合(武具：*Il.*に40件、*Od.*に6件。城壁・胸壁：*Il.*に2件)も、これと同様に考えることができるであろう。それらの物は、いずれも飾りではなく、武人たちが実戦で使用する実用の武具や施設である。しかも、カロスとされている武具の多くは、その使用者たちを勝利または優勢に導く武具である<sup>46</sup>。また、ParisがMenelaosとの一騎打ちに使用する武具も、カロスなるものとされたうえで、詳しく語られる。これらのことから導かれるのは、カロスなる武具とは、優れた戦いをする武人に似つかわしい武具、あるいは、勝利することを期して身に付けるような武具のことだった、ということである。これらの場合のカロスとは、LSJのカロスの記事第2項のように、道具としての有用性を表していると解することもできるが、問題はそれが外貌と関係なしに語られているかどうかということである。後述するAchilleusのカロスなる楯(*Il.19.380*)の例を考えると、やはり、卓越した内実を示唆する外貌を表すものであったとも考えられるのである。

もちろん、内実とは関係なく、見た目の心地よさを表す時にも、カロスという語は使われた。しかし、外貌を持つ何物かをこの語が修飾する時には、いつでも見た目の心地よさを含意していたと考える必要はないだろう。さもなくば、武人で美形である者はみな優れた軍事的能力を備えており、また、見た目に心地よく作られた武具や軍事施設はすべて軍事的に有用だ、という奇妙な事態を想定しなくてはならなくなるからである。従来そのように解されてきたふしもある

が<sup>47</sup>、その見方が正しいという保証はない。私たちにとって問題なのは、Homerosの世界におけるphysiognomyの真実がどうであったかということよりも、Homerosを聴くギリシア人はそのphysiognomyを現実とどう引き合わせて解することができたか、ということである。確たることとして言えるのは、カロスの語が軍事的卓越性を裏打ちする外貌を表していると考えれば、これが、見た目に心地よい外貌を表しているとは考えなくともよいということである。

確かに、カロスだが武人としては優れていないとされるParisやNireusについての扱いは混乱を招きやすい。II.3.43-45は、アカイア勢は、Parisが*kalon eidos*を有しているのに力も勇気もないのを見て笑うだろうという。彼が実際、優れた外貌を持っていた(3.39:*eidos ariste*)ということと考え合わせれば、これは、カロスといえる外貌を持ってさえすれば、必ず内実も優れているものだ、と一般に信じられていたと思わせるかもしれない。しかし、ここで気を付けるべきことは、Parisの場合、カロスとされる外貌(*eidos*)は、「アフロディテの贈り物」(3.54-55)と言われる類のものであるということだ。つまり、ギリシア勢がParisを見て笑うのは、彼が「カロスなのに勇気がない」からというよりも、彼が「優れた武人らしい*eidos*を有しているのではないのに、ともかくその*eidos*がカロスであるがゆえに前線に立っている」と彼らが見做すからだ、と解される<sup>48</sup>。これはむしろ、外貌自体が何らかの点で優れてさえいれば軍事的内実も優れていると思ひ込む、ということは愚と見做される、というメッセージである。Ganymedes (II.20.233, 235)や求婚者達の給仕たち(Od.15.332)がカロスなのと、武人がカロスなのとは、違うことなのである。重要なのは、人物を武人としてカロスと言っているのか、愛人や給仕等としてカロスと言っているのか、また、武具を武具として、城壁を防御施設としてカロスと言っているのかどうか、ということである。少なくとも軍事的なコンテクストで語られる時には、カロスの語が、「外貌自体が優れているという様子」よりも、まず第一義的に、「軍事的内実が優れていることを示唆するような外貌を持っている様子」を表すものであった、と考えるのが無難であろう。いっぽう、Nireusは、「ダナオイ勢中Achilleusに次いで最もカロスなる者としてイリオンにやって来た」が、弱い男(*alapadnos*)であったと語られる(2.673-75)。それならば、彼はAchilleusと同じタイプの外貌を有していたのだと考えられる。彼が勇士であると推測されることは正しい。この場合は、彼の外貌は軍事的能力を示唆するものであったが、彼の内実はこの示唆を裏切るものだったということに過ぎない<sup>49</sup>。

カロスだとされるAchilleusの楯(II.19.380)についての長大な描写(18.478-608)において強調されているのは、その頑丈さ(18.478-82)のほか、見た目の心地よさと言うよりは見た人間が驚嘆する(18.466-67)ほどの装飾の精巧さである。それは、これが神の手で作られたということを証示するものである。そしてそれこそが、この楯全体が完璧な出来の物であるということを表す標章なのでもあり、そこから、この楯が並ならぬ有用なものであることも見込めるわけである。これは、外貌がそれとは別の内的卓越性を裏打ちするという状況の究極的な例である。しかし、現実の世界においては、このように内実と外貌がはっきりと対応しているということが、いつも望めるわ

けでないのは確かである。もし、外貌はいつも内実を反映するものだ、と考えるとすれば、現実の世界においては、それはハズレの多い愚かな認識と言うほかはない。しかし、いつでもそうなはずだと彼らが盲目的に信じていたと考える必要はないのである。内的に卓越しているものには「それらしい外観」が伴っていることは往々にしてある、と考えることはなんら奇異なことではない。それらしい外観を見せている場合にのみ、それを「見」分ける能力と習慣を彼らが身につけていた、と考えればよいのである。

以上のことから、Homeros においては、カロスという語は、視覚的に捉えられる対象を修飾する時は、視覚的な快を与えるという事態を表すだけでなく、一外貌が内実を裏打ちしうるような場合には一内的な卓越性を示唆する外貌を有していることを表す、ということもあったと判断される。それならば、戦死や戦死者をカロスだというのは、この後者の場合であるという可能性が見込まれるのである。

#### 《5.カロスなるイメージの中に示唆されているもの》

では、Tyrtaios, Fr.10 においては、戦死や戦死者について、どんな内実が特段によきものとして示唆されているのだろうか。それは何よりも 1-2 行および 30 行が描いている視覚的なイメージから辿られるべきである。1-2 行のテキストをよく見ると、イメージを再現するに当たって考えておかなければならない点が幾つかある。

τεθνάμεναι γὰρ καλὸν ἐνὶ προμάχοισι πεσόντα 1  
 ἄνδρ' ἀγαθὸν περὶ ἧι πατρίδι μαρνάμενον· 2

その一つは、1 行がカロスだとしている *tethnamenai* の意味である。*thanein*(死ぬ)の完了形不定詞であるこの形には、2つの解釈の可能性がある。一つは、「死んでしまっている状態」を表すという可能性であり、もう一つは、現在形の強調を表すという可能性である<sup>50</sup>。前者の場合は、カロスによって修飾されているのは、「前線で戦いながら倒れて死んでしまっていること」となるが、それでは「戦いながら倒れる様子<sup>51</sup>」と「死んで横たわっている様子」とが一致しないので、イメージがまとまらない。また、何かよきものの示唆が見出されるとすれば、それは戦ったのちに死んでしまっていることにおいてよりも、戦いながら倒れて死ぬことにおいて、の方が考えやすい。しかしここで重要なのは、この完了不定詞が状態を表すものであるか否かよりも、この死が、「戦いながら前線で倒れて」という句によって限定されている、ということであろう。いずれにしても、ここに描かれている死のイメージは、彼が戦いつつ倒れるところから始まっているのである。

彼が死ぬということは、特殊な場合を除いては<sup>52</sup>、戦闘行為の失敗である。しかし、ここで

称えられているものは、彼の死自体であって、死の前からあったものではない。だからそれは、Vernant が '*panta kala*' (II.22.73) の実体として見ようとする「若い肉体」の類ではない。それはまた、彼が死ぬ瞬間までに収めた戦績でもない。確かに、密集隊形においては、攻撃することだけではなく、持場を守ることも重視された<sup>53</sup>。しかしここでは、彼が死ぬまでにどれだけ持ちこたえたかということとは関係なく、彼の死が称えられている。まさに死ぬ時のことが問題とされているのである。

ここで考え併せなくてはならないのは、2 行の *andr' agathon*(よき男)という語である。Adkins は、*agathos* の語が、*arete* の語とともに *competitive value* を表すものであり、成功を収めた人物や成功を約束する物事に適用される言葉であったと言うが<sup>54</sup>、Tyrtaios においてもそれが同等に有効なのかは疑問である。なぜなら、彼の Fr.12 の 10-20 行では、「戦争における *aner agathos*」なる者(10, 20 行)の条件として示されているのは、要するに、前線に立ち肝を据えて勇敢に戦うということに過ぎず(15-19 行)、また、そのように振舞うことが *arete* (13 行) の内容だとされているのである：

οὐ γὰρ ἀνὴρ ἀγαθὸς γίνεται ἐν πολέμῳ 10  
 εἰ μὴ τετλαίῃ μὲν ὄρων φόνον αἱματόεντα,  
 καὶ δηίων ὀρέγοιτ' ἐγγύθεν ἰστάμενος.  
 ἦ δ' ἀρετῆ, τὸ δ' ἄεθλον ἐν ἀνθρώποισιν ἄριστον  
 κάλλιστόν τε φέρειν γίνεται ἀνδρὶ νέωι.  
 ξυνὸν δ' ἐσθλὸν τοῦτο πόλῃ τε παντί τε δήμῳ, 15  
 ὅστις ἀνὴρ διαβάς ἐν προμάχοισι μένηι  
 νωλεμέως, αἰσχροῆς δὲ φυγῆς ἐπὶ πάγχυ λάθηται,  
 ψυχὴν καὶ θυμὸν τλήμονα παρθέμενος,  
 θαρσύνῃ δ' ἔπεσιν τὸν πλησίον ἄνδρα παρεστῶς·  
 οὗτος ἀνὴρ ἀγαθὸς γίνεται ἐν πολέμῳ. 20 (Fr.12.10-20)

確かに、この 10 行と 20 行には、*ginetai*(成る)という語が付されている。*andra agathon genesthai* ということは「戦死すること」によって達成するのだという見方も、後には行われたりもする<sup>55</sup>。しかしここにおいては、彼は戦死してもよいし(23-34 行)、生残ってもよいのである(35-42 行)。何らかの戦績を収めること(21-22 行)も、見事な戦死をすること(23-26 行)も、勝利して凱旋すること(35-36 行)も、ポテンシャルとして語られているに過ぎない<sup>56</sup>。ここでは、彼が *agathos* であるためには、彼が戦いにおいて成功を収めるか否かは問題とされていない。このことをふまえるならば、Fr.10 の 1-2 行が言おうとしていることは、「*aner agathos* なる者として死ぬことがカロスだ」ということであって、「死ぬことによって彼は *aner agathos* にな

る」ということではない。Tyrtaios においては、兵士は死ぬ前から *agathos* たりうるのであり、それは彼の戦績の有無で決定されることではないのである。

もう一つ、2行の *peri patres*(祖国のために)という句にも注意を向けなくてはならない。この一句を、戦死を称揚するこの重要な個所に組み込んでいるからには、Tyrtaiosが「祖国のために」という要素を、軽視していないことは確かである。しかし、この要素は視覚的なイメージにはなりにくい。どんな目的を抱いて死んだかによって、死にざまが違って見えるということは考えられないからである。従って、カロスという語が照らし出す視覚的なイメージを通して伝えられるメッセージの中では、「祖国のために」という要素は影が薄くなっていると言わざるをえない<sup>57</sup>。この要素が30行の対応部分においては省略されているという事実も、これがカロスという語の強調する最たる要素ではないということを窺わせる。

これらのことを踏まえると、1・2 行の語句が映し出す、カロスなる死の視覚的なイメージとは、「前線で果敢に戦っている最中に倒れて死ぬに至る」という様子である。このイメージが彷彿とさせるのは、彼が、最後まで前線に踏みとどまり、態勢を崩すことなく戦っていた、そしてその態勢のままで終りを遂げた、ということである。

しかし奇妙なことに、Tyrtaios は、そこに含意されているよきものが何なのかということまでは語ろうとしない。彼はただ、よきものを示唆するイメージを示してみせるだけなのである。そのイメージの奥にいかなるよきものを見出すかは、我々に任されているともいえるだろう。しかし、果敢な戦いぶりのうちに果てた、ということが含意するよきものを探るのはさほど難しいことではない。とりあえず考えうるのは、次の3点である。

(1) 献身：生命という、人間にとって最も重要で根源的な *resource* を、戦闘に費やしたということである。これは、IIにおいて *Achilleus* が、生命を捨てる決意で *Patroklos* の仇討ちにとりかかることと同じである。ペリクレスがその葬礼演説(Thuc.2.43.2)で戦死を *kallistotes eranos* (最も美しい貢献) と言い表すのも、同じ観点からである。

(2) 任務の履行：生きている限りにおいて、彼は踏み止まって戦うという任務を果たした。*Bowra* は、なぜカロスなのかは説明しないものの、任務の遂行が戦死の「カロス」なる成分なのだとしている<sup>58</sup>。*Loroux* もこの見方を支持している<sup>59</sup>。踏み止まるということが兵士の重要な任務の一つだということは、*Homer* における「踏み止まれ」の繰返しからも明らかである。ただし、彼は死によってその任務を全うしたことになるのか、死んだところでその任務を離れたということになるのかは、必ずしも自明ではない。興味深いのは、歴史記述や葬礼演説を見渡してみても、踏み止まって死ぬことを任務の遂行としてはっきりと称えることは、めったになされなかったように見えることである。重装歩兵の死をはっきりした言葉で任務の遂行と見做すのは、現存テキストの中では4世紀の *Demosthenes* の葬礼演説(60.19)が、管見の限り最初である<sup>60</sup>。*Perikles* の葬礼演説(Thuc.2.43.1)も、戦死者たちは兵士の義務を弁えていたと言うが(*gignoskontes ta deonta*)、兵士の義務を果たしたという言い方をしていない。



Plutarchos, *Apophthegmata Laconica* に引かれているのスパルタの諺：「ある人が彼に闘鶏を与え『これは勝利を目指して戦いながら死ぬ』 (*machomenoi apothneiskousi*)とやった時、某 Kleomenes は『しかしむしろ、それらを殺すほうの鶏をいくつか私にくれ...』とやった」(224B8-C3)は、一その現在分詞によって Tyrtaios, Fr.10 の1-2行を思い起こさせるものであるが、一 戦闘の失敗としての戦死に対するこのアンビヴァレントな感覚をよく伝えている。とはいえ、明瞭な言葉で賛辞を浴びるのではなくとも、死ぬまでは踏み止まったということが、任務遂行の一つの形として何らかの肯定的感情を持って見られることは自然なことである。

(3) 努力の究極的維持：最後に、しかし最も見逃せないこととして挙げられるのは、彼が気力と体力を緩めることなく、戦う姿勢を死ぬまで貫いたということである。Bowraが、兵士たちの死は、叙事詩や悲劇に見られる幾多の英雄たちの死と同じ「自己実現」というべきものだ、と言っているのは、この点に通じるであろう<sup>61</sup>。最後の瞬間まで戦いの努力を続け、また、持っている体力と気力の全てを戦いに費やすということは、ほぼ同じ時代のエフェソスのKallinos (Fr.1.5)が奨励していることでもある：καὶ τις ἀποθνήσκων ὕστατ' ἀκοντιοᾶτω (「誰でも、まさに死にんとする時、最後の投槍を投げよ」)。この詩人の場合は、その行為がどんな言葉で称えられるのかということまでは語らないが、このようなことに価値をおく気風がこの時代にあったということを伝えている。

Fr.10 の1-2行が伝えているのは、兵士の visual な死にざまの中には以上のようなよきものが見て取れるというメッセージだと考えられる。

では、30行が示唆するよきものとは何か。「前線で倒れた」兵士はいかなるよき者として描き出されているのか。ここで与えられている兵士のイメージが表すのは、基本的には、1-2行が表しているものと同じであろう。なぜなら、「前線で倒れた」という句は、1-2行の「前線で戦っている最中に倒れて死ぬ」ということを、そのまま思い起こさせるからである。27行からの文脈とあわせて見るならば、ここで強調されているのは、いかに魅力的な青年兵士といえども、カロスとなるのは戦闘の中で死ぬことによってだ、ということである。それだけではなく、かのような死にざまを見せた兵士は誰でも、その容姿の美醜にかかわらず、またその戦績にかかわらずカロスとなる。そうだとすれば、かのような死に様を見せた彼は、ひとつの戦いに文字通り彼のすべてを懸けたということ、目に見える形で証しされた者として称えられているのだ、といえる。

いま挙げた「よきもの」のうち、どれが、どれだけ明瞭に、Tyrtaios とその聴衆によって認識されていたかは分らない。しかし、何らかの内なるよきものを映し出す死に方というものがともかくもあり、そしてそれが一般の重装歩兵の誰でも手の届く所にある、ということが示されたことは画期的なことであった。しかも、そのよきものは、魅惑を含意するカロスという語によって示唆されているのである。このことによって、重装歩兵は誰でも、その資質によらず努力次第で、並ならぬ価値のある死を遂げることができる、と信じるのが可能になったのである。

彼のカロスなる死は、それが戦績に結びつくものではないため、積極的には評価しにくいものであった。また、その死の意義は、倫理的価値が複雑微妙に組み合わせられたものであるため、言葉では表現しにくいものでもあった<sup>62</sup>。しかるに、彼の死の価値を表現するためには、その内実を彷彿とさせるイメージを描いてみせることが、最も簡潔で間違いのない方法であった。その意味で、彼の死は、イメージを浮き上がらせるカロスという語で称えられることが最もふさわしいのである。Tyrtaiosはこの詩でカロスという概念を使うことにより、いわば、兵士の死にざまが、彼の中のよきものを一気に簡潔に映し出して、直感的な理解で人を感動させる優れた絵をなすものだ、と指摘しているのだ。いわば、彼の死にざまを思い浮かべれば、きらびやかではないが、人間一人分の生命の重みが懸った、彼の行動の侮れない価値を感得することができる、そしてそれは人の心を揺さぶり称賛を掻き立てるほどのものだ、と言っているのである。

#### 《6. 周辺事情》

最後に、Tyrtaiosにこのような詩を書かせたものは何かを、手短かに概観する。一つは、7世紀に発展した重装歩兵の戦闘方法であろう。それは重装歩兵が隊列を組んで、主として突き槍と刀と楯を使い、敵と至近距離で戦うというものであった<sup>63</sup>。重装歩兵は前面の守りは固いが背面や側面を弱点としていたから、勝ち進むことにもまして、戦列を破りぬけられないようにすることが肝要であった<sup>64</sup>。そのためには、各兵士は、たとえ前進できなくとも、持場を死守することが要求され、また勝ち進むか死ぬかという覚悟も必要であった。もう一つは、第二次メッセニア戦争であろう。660年頃から20年間も続いたメッセニア人との戦争は、長引くにつれて、勝利するための抜本的な方策の必要性をスパルタの中に高めていた。このことも、一人ひとりの兵士が戦死を恐れずに徹底的に戦うことを要求した。そのためには、彼らをその気にする必要があった。しかるに、7世紀後半頃には、兵士たちの多数を平民層の戦士が占めるようになっていた<sup>65</sup>。平民戦士たちが進んで命を懸けて戦うようになるためには、ホメロスの戦士たちを動機付けていた貴族的な矜持(e.g. *Il.*12.310-28)に期待することはできない。そういうものを何も持たない大衆の心をも動かすことのできる動機付けが求められていた。もう一つは、第一次メッセニア戦争以来、農業に従事させたヘロットを常に監視する態勢をとり、軍事的な緊張状態に馴化していた<sup>66</sup>スパルタ人の気質であろう。それは、「楯を携えているか、楯に載せられてあれ」だとか、「この楯を守るか、さもなければこの世にあるな」という諺を持つことのできる気質であった。また一つは、エレゲイアというジャンルが、小規模な聴衆に向けて直接語りかける機会をもたらしたということがあげられよう<sup>67</sup>。

これらの状況が、たまたまこの時代にこの地に現れたTyrtaiosの感性を刺激し、叙事詩が用いていたカロスという概念によって美意識をくすぐることによってスパルタの平民を勇戦へと

勧奨するというアイデアを生み出させたのであろう。

## 《7. 結論》

Tyrtaios の使った Homeros の言語においては、カロスという語がなんらかの卓越性を称えるのはいつも、官能的に捉えられる対象を修飾する時であった。この語で倫理的な卓越性を直接に称えるという用法は確立していなかった。視覚的に捉えた対象をカロスだという時、それは、その外貌自体が快を与えるという場合のほか、その対象が、内的な卓越性を示唆する外貌を有しているという場合もあった。Tyrtaios が Fr.10 で戦死や戦死者をカロスとするのは、この後者の場合であったと考えられる。彼は、「兵士が前線で勇敢に戦っている最中に倒れて死ぬ」というイメージを提示しこれをカロスだとして、そのような死にざまは、青春の只中にある若者の姿よりも見る人の心を高揚させ賛嘆させるものだとして主張した。なぜそうなのかということとは、言葉では語られないが、そこに描かれたイメージが語っている。彼が前線に踏み止まるという任務に最後まで背かなかったこと、彼が戦いに文字通り命を懸けたこと、彼が最後の瞬間まで戦いの努力を怠らなかったことなど、形には残らない彼の美点が、そのような死にざまの中に映し出されているから、というのがその答えであろう。

## 文献表

- A.W.H.Adkins, *Merit and Responsibility: A Study in Greek Values* (1960).  
 A.W.H.Adkins, 'Callinus 1 and Tyrtaios 10 as Poetry', *HSCP* 81(1977), 59-97.  
 G.Autenrieth, *Homeric Dictionary* (1984). (originally German 1877)  
 J.P.Barron and P.E.Easterling, 'Early Greek Elegy: Callinus, Tyrtaios, Minnemos', in P.E.Easterling & B.M.W.Knox (ed.), *Cambridge History of Classical Literature I: Greek Literature* (1985), 128-36.  
 M.W.Blundell, *Helping Friends and Harming Enemies: A Study in Sophocles and Greek Ethics* (1989).  
 E.Bowie, 'Miles Ludens? The Problem of Martial Exhortation in Early Greek Elegy', in O.Murray (ed.), *Sympotica* (1990), 221-29.  
 F.Bourriot, *Kalos kagathos - kalokagathia: d'un terme de propagande de sophistes à une notion sociale et philosophique: étude d'histoire athénienne* (1995).  
 C.M.Bowra, *The Greek Experience* (1957).  
 C.M.Bowra, *Early Greek Elegists* (1969).  
 D.A.Campbell, *The Golden Lyre* (1983).  
 C.M.Dawson, 'Spoudaiogeloion: Random Thoughts on Occasional Poems', *YCS* 19(1966), 39-76.  
 W.Donlan, 'The Origin of kalos k'agathos', *AJPh.* 94 (1973), 365-74.  
 K.J.Dover, *Greek Popular Morality in the Time of Plato and Aristotle* (1974).  
 D.Gerber, *A Companion to the Greek Lyric Poets* (1997).

- B.Hainsworth, *The Iliad: A commentary, volume III: books 9-12* (1993).
- D.Halperin, 'Platonic *Eros* and What Men call Love', in N.D.Smith (ed.), *Plato: Critical Assessments* (1998), 66-120. (originally 1985)
- E.Irwin, *Solon and Early Greek Poetry: The Politics of Exhortation* (2005).
- W.Jaeger, *Paideia: The Ideals of Greek Culture, volume I*, 2nd ed. (1945).
- W.Jaeger, 'Tyrtaeus on True Arete', in *Five Essays* (1966), 101-142.
- C.Janaway, *Images of Excellence* (1995).
- N.Loroux, 'The Spartans' "Beautiful Death"', in *The Experiences of Tiresias* (1995), 63-74. (originally French 1977)
- N.Loroux, 'Mourir devant Troie, tomber pour Athenes', in *Information sur les sciences sociales* 17.6 (1978), 801-17.
- N.Loroux, *The Invention of Athens* (1986). (originally French 1981)
- R.Luginbill, 'Tyrtaeus 12 West: Come Join the Spartan Army', *CQ* 52 (2002), 405-414.
- J.Moravcsik, 'Noetic Aspiration and Artistic Inspiration', in M.Moravcsik and P.Temko (ed.), *Plato on Beauty, Wisdom, and the Arts* (1982), 29-46.
- O.Murray, 'War and Symposium', in W.Slater (ed.), *Dining in a Classical Context* (1991), 83-103.
- 岡道男、  
J.J.Pollitt, 『ホメロスにおける伝統の継承と創造』(1988).  
*The Ancient View of Greek Art: Criticism, History, and Terminology* (1974).
- C.Seltman, *Approach to Greek Art* (1948).
- H.W.Smyth, *Greek Grammar* (1920,1956).
- B.Snell, 『精神の発見』(新井精一訳) (1974). (originally German 1955)
- H.van Wees, *Greek Warfare: Myths and Realities* (2004).
- W.J.Verdenius, 'Tyrtaeus 6-7D: A Commentary', *Mnemosyne* 22 (1969), 337-55.
- W.J.Verdenius, 'Callinus Fr.1: A Commentary', *Mnemosyne* 25 (1972), 1-8.
- J.-P.Vernant, 'Panta kala: From Homer to Simonides', in *Mortals and Immortals* (1991), 84-91. (originally French 1979)
- J.-P.Vernant, 'A "Beautiful Death" and the Disfigured Corpse in Homeric Epic', in *Mortals and Immortals* (1991), 50-74. (originally French 1982)
- M.L.West, *Iambi et elegi Graeci, vol.2* (1972).
- M.L.West, *Greek Lyric Poetry: the Poems and Fragments of the Greek Iambic, Elegiac, and Melic Poets down to 450 B.C.* (1993).
- N.Yamagata, *Homeric Morality* (1994).
- 吉武純夫、  
「カロス・タナトスとは何か(上)」、『ギリシア悲劇における死の受容についての研究』(科学研究費研究成果報告書、2002年)、1-32.
- 吉武純夫、  
「戦死者を見つめ直す：デモステネス葬礼演説」、北嶋美雪編、『デモステネスにおける説得の論理と修辞—アッティカ弁論術の精華とその発展—』(科学研究費研究成果報告書、2004年)、1-27.
- S.Yoshitake, 'The Achievements of the War Dead: Another Licence and its Logic in the Athenian Funeral Oration', in D.Pritchard (ed.), *War, Culture and Democracy in Classical Athens* (forthcoming).

<sup>1</sup> 本論文は、吉武(2002)において、「第4章：Tyrtaios の『カロンなる死』」として予告していたものであるが、Homeros についての新しい知見も加わったので、独立した論文として書くことにした。本論文の作成にあたっては、2005-06年の名古屋大学からのサバティカル、そしてブリストル大学古典学部及び同大学 Institute of Advanced Studies の提供してくれた研究環境から大いに恩恵を受けている。

<sup>2</sup> 戦死に対する評価がカロスという概念に繋げられる兆しも Homeros においてあったが、その表現は曖昧であった。II.22.73や15.495が、戦死そのものを直接肯定したものとはいえないことは、吉武(2002)、18-29で明らかにした。II.22.110においてHectorが自身の死を *eukleios* と修飾するという例外は、他のトロイア人たちが門の内側から見守る中でのAchilleusとの一騎討ちという、特別な状況によったものだけということも、そこに述べた。

<sup>3</sup> Fr.10の原典テキストは、下の3節に掲げてある。

<sup>4</sup> Dawson 51: 'arresting'; Adkins (1997), 95: 'novel'.

<sup>5</sup> 本稿では、視・聴覚などの官能に訴えるという意味で、官能的という言葉を使うことにする。

<sup>6</sup> Luginbill, 410-13. cf. Jaeger (1966), 112-13.

<sup>7</sup> Liddell, Scott and Jones (ed.), *A Greek-English Lexicon*, 9th ed. (1996)による *kalos* の定義は次のようにまとめられる： I. (1) (of outward form) beautiful, fair; (2) token of love or admiration; (3) *to kalon* meaning beauty; II. (in reference to use) good, of fine quality; III. (in a moral sense) beautiful, noble, honourable.

<sup>8</sup> *Rhet.*, 1366b.36-1367a.6. cf. 1358b.38-1359a.5.

<sup>9</sup> Fraenkel, 156; Verdenius (1969) ad 21; Adkins (1960), 164; Loraux (1995), 275 n.5.

<sup>10</sup> Vernant (1979), 84; Vernant (1982), 50-51, 62-64.

<sup>11</sup> 比較級、最上級も含める。中性対格形で副詞のように使われている例も、また1件しかない副詞形(καλως)も含める。なお、便宜上、3件ある *kallimos* は *kalos* と同じ語と見做す。

<sup>12</sup> 上の324件には含めていないが、*kallos* という名詞(II.、Od.ともに8件)の使用例もまた、すべて人物や物体の属性として言われたものである。

<sup>13</sup> 主として古典期における同じ事情を示した記述として、次のようなものがある。Dover, 69: '*Kalos* applied to a person, some part of a person, or any artefact or material object, means 'beautiful', 'handsome', 'attractive.'; Janaway, 59: 'the word in ordinary Greek when applied to people and physical things has a central meaning to do with visual attractiveness'. 外貌とそれ以外の領域における卓越性の関係については、以下4節を見よ。

<sup>14</sup> 歌：II.1.473, 18.570, Od. 1.155, 8.266, 10.277, 19.519, 21.411; 声：II. 1.604, Od. 5.61, 12.192, 24.60; 歌人に耳を傾けること：Od. 1.370, 9.3; 音楽と酒を堪能すること：Od.9.11;

風：Od. 11.640, 14.253, 14.299; 「目に見える限りのもの」(*hotti phaneei*)：II.22.73。ただし、この最後の「目に見える限りのもの」が具体的にどこまでを含んでいるのかは、不明である。一応、「若者の死体が横たわっている情景」と解する。

<sup>15</sup> II.6.326, 8.400, 13.116, 17.19, 21.440; Od.2.63, 8.166, 15.10, 17.381, 17.483, 18.287, 20.294, 21.312.

<sup>16</sup> II.24.52; Od.3.69, 3.358, 6.39, 7.159, 8.543, 8.549, 17.583.

<sup>17</sup> Blundell, 26-59.

<sup>18</sup> Macleod, ad loc を参照のこと。Loeb 訳(A.T.Murray)も、このカロスを 'fitly' と訳している。

<sup>19</sup> Autenrieth も、*kalos* の項目には、与格支配の 'fitting, becoming' という意味があるとするが、「倫理的卓越」という意味は載せていない。

<sup>20</sup> 例えば、Stanford ad 17.393ff は、'how extremely kind ... you are to me' と解している。

<sup>21</sup> cf. Hainsworth ad II.9.615: '*kalos* is unusual in the epic as a moral term.'

<sup>22</sup> Moravcik, 31.

<sup>23</sup> *Phaedr.*(250d-e): 「われわれは、美を、われわれの持っている最も鮮明な知覚を通じて、最も鮮明にかがやいている姿のままに、とらえることになった。というのは、われわれにとって視覚こそは、肉体を介してうけとる知覚の中で、いちばんするどいものであるから。…しかしながら、実際には、美のみが、ただひとり美のみが、最もあきらかにその姿を顕わし、最もつよく恋心をひくという、この定めを分け与えられたのである。」(藤沢令夫訳) *Symp.* (210a-212c)に展開されているのも、同趣旨の内容である。cf. *Phaedr.* 238b7-c4; *Symp.* 197b3-9, 201a3-10, 203c1-4, 204b1-5, 204d3-5, 206e2-3; *Rep.* 402d3-7.

<sup>24</sup> たとえば、Platon が *Hippias Major*, *Gorgias*, *Philebos* 等において、古典期に一般的にカロスが表す意味としてあげているのは、(1)適合、(2)有用、(3)快、(4)適正、と整理することができるだろう。

<sup>25</sup> Donlan, 368, n8.

<sup>26</sup> cf. Halperin 110, n112: 'the word normally refers to the quality of outwardly attractive or appealing'.

<sup>27</sup> 死ぬ時にカロスになる、ということを強調しているのは Dawson, 57 である。

<sup>28</sup> 作品の統一性を主張しているのは、Jaeger (1966), 138 である。

<sup>29</sup> cf. Barron and Easterling, 133; Adkins (1977), 96.

<sup>30</sup> Luginbill, 410-11, 413.

<sup>31</sup> Verdenius (1969) ad 4, ad9. cf. Jaeger (1966), 114.

<sup>32</sup> 例えば、Fr.11 は、戦死をいかなる意味においてもよきものとは見ようとしていない。避けるべき死に方がどういうものであるかは具体的に表しているが(19-20行)、どのようにして戦死するのがいいかを示そうとはしていない。戦死は厭うべきものではないとしながらも(5-6行)、本音では避けたいものであることを白状している(13行)。Fr.12 は、「よき男」(*aner agathos*)に相応しい死に方をさりげなく描いてはいる。「自身は前線で倒れていとしい命を失い、彼の都市とその民と父の名を高めた一胸と、臍付き楯と、胴よろいを、何度も前方から貫かれて」(23-26行)というその死に方は、前向きに戦っている最中に撃たれて死ぬということであり、Fr.10 がカロスとする死に方とはほぼ一致するものである。しかし、「よき男」の何たるかを示すことを目的とした Fr.12 からは、その死自体に対する肯定評価はやはり聞こえてこない。ここでは、彼の死への評価は、死後における人々の哀惜という間接的な形でしか表されていない(27-34行)。

<sup>33</sup> Verdenius (1969) ad 1.

<sup>34</sup> cf. Adkins (1977), 76, 96.

<sup>35</sup> Verdenius 自身の考えは違うが、Fr.10 を 2 つの詩と見る説は、Verdenius (1969) ad 15 に整理して紹介されている。

<sup>36</sup> Jaeger (1966), 138; Verdenius (1969) ad 15.

<sup>37</sup> Gerber 92.

<sup>38</sup> Verdenius (1969) ad 1 は、10.1 がこの詩の始まりであるという見解を示している。

<sup>39</sup> この数には、武人の肌やヘルメットの房毛等の間接的なものと、曖昧な 22.73 (*panta kala*) は含まれていない。

<sup>40</sup> Jaeger (1945), 416, n.4; Donlan (1973), 367-38. 上の注 13 も参照のこと。

<sup>41</sup> *Il.* 18.518 では、軍事の女神である Athena も、Ares と併せて双数形でカロスだとされている。カロスと修飾される女神は Athena だけに限らないが、この個所においては、Athena 女神が Ares と同じ軍神という資格においてカロスとされているのだと考えるのが妥当だろう。

<sup>42</sup> Antilochos がいかに優れた戦士であったかは、*Il.* 15.570 に記されている。



43 Memnon が Achilles に殺されたことが、*Aithiopsis* において語られていたということについては、岡、254ff、403ff.を参照せよ。Antilochos を討ち取ったということは、*Od.*4.187-88 に記されている。

44 ギリシア軍中第 2 の実力者 Aias (*Il.*2.768, 13.621-25)もまた、Achilleus に次ぐ外貌(*eidos*)の持ち主とされている(*Il.*17.279-80 = *Od.*11.550-51)。しかし、彼についてはカロスという語は使われていない。

45 彼らの「卓越した外貌」とは、Achilleus(*megas*: *Il.*21.108)の場合も Aias(*pelorios*: *Il.*3.229, 7.211, 7.288)の場合も、体躯の大きさを含むものだと思われる。cf. Ares の体躯の大きさ(*megas*: *Il.*18.518)。

46 例えば、*Il.*の 40 件のうち、17 件は Achilleus の武具、*Od.*の 6 件のうち、5 件が Odysseus の武具である。

47 cf. Seltman 28-29: 'To say that for the Greeks Beauty and Goodness were one and the same is an error.' Donlan 370 は、'In Homer beauty was an important aspect of the physical ideal and a desirable attribute of the heroic warrior...'<sup>1</sup>と言っている。それが彼らの「理想」であったとするのは賢明な言い方である。問題は、その理想と現実がどう関係しているとギリシア人たちが考えていたかということである。Verdenius (1969) ad 21 は、「5 世紀末まで *kalos* の moral and visual aspects は明瞭に区分されていなかった」と言うが、混同されていたという意味なら当たっていないと思われる。Adkins (1960), 164 も同様。

48 そのように解するのではなくては、3.44 の「王子が前線にいる、と言って(笑う)」*phantas aristeia promon emmenai* という部分を活かすことが出来ない。cf. Loeb 訳(A.T.Murray 1924)。

49 このほかに、外貌自体のよさだけを言っているのか、内実のよさを示唆して言っているのかが取り違えられることもありうる。ただし、普通、言葉は混乱が生じないように配慮して使われるものである。

50 Smyth, §1947.

51 *marnamenon* の現在分詞は、「戦いながら」という進行中の動作と死との同時性を表すものと解される。cf. Smyth, §1872a. 進行中という意味なしに、戦いを反復する者が、または、試みる者がという意味に解するのでは、文全体の意味を途方もないものにしてしまう。

52 例えば Kodros の神話のように、死が何らかの益をもたらすことが神託等によって保証されており、死ぬことが最初から目指されているような場合ならば、戦死は作戦の成功を意味する。

53 Homeros から Tyrtaios の時代の密集隊形は、古典期ほど密ではなく、自由に活動する余地も大きかったのは事実である。しかし、隊列を敵に突破されないようにすることが各兵士の重要な任務の一部であった。cf. Osborn, 65. cf. van Wees (2000), 149-51, 154.

54 Adkins (1960), 33,35. 成功を評価する価値観を *competitive value* と呼ぶことについては、同書、6 を見よ。cf. Yamagata, 190-92, 222, 237.

55 e.g. Thucydides, 2.35.1; Demosthenes, 60.1; Hyperides, 6.28. cf. Loraux (1986), 100.

56 10 行と 20 行に対する Edmunds の訳(Loeb, 1931)も、West の訳(1993)も、かのような兵士は戦争または戦時において *agathos* であると訳しており、何かを果たすことによって *agathos* になるという訳し方はしていない。

57 このことは、後に「特に古典期の悲劇において顕著であるが」カロスという形容がしばしば愛国心とは関係のない死や、時には反愛国的な死にさえも適用されるようになるという事情とも無縁ではない。

58 Bowra (1969), 60. Bowra のこの見解に対し、私は、カロスとされているのはあくまでも、兵士の死にざま、そのイメージであると捉える。そのイメージは内なるよきものを示唆してい

---

るが、その内的なものが直接カロスという語で称えられているわけではない。

<sup>59</sup> Loraux (1986), 101. (ただし、これについて彼女の引用した文言の reference (385, n.107)は誤りであろう。)

<sup>60</sup> Dem.18.208 にもその考え方が示されている。吉武(2004)4-6.

<sup>61</sup> Bowra (1957), 37: 'Just as the grand figures of legend, like Ajax and Heracles, die violent and fearful deaths, so other men were glad to die in battle because this set a crown on their lives and proved that in the ultimate test they shrank from nothing to prove their worth.' '...the self-realization which a man finds when he sacrifices everything that he has, and exercises a privilege which belongs to him alone.'

<sup>62</sup> 戦死の意義を明らかな言葉で語ろうとして、葬礼演説の弁論家たちがなした悪戦苦闘ぶりについては、Yoshitake (forthcoming)をみよ。

<sup>63</sup> van Wees, 172.

<sup>64</sup> Osborn, 65.

<sup>65</sup> 伊藤、143.

<sup>66</sup> 伊藤、148.

<sup>67</sup> Murray, 93,96,98.

**Abstract**

*Kalos Thanatos* : Tyrtaios' Thoughts on Death in Battle

Sumio YOSHITAKE

In the language of Homer, in which Tyrtaios wrote his poems, the word *kalos* indicated some excellence in an object only when it was a person, physical thing or a matter that could be perceived sensuously. There was no example of this word directly describing 'moral beauty' in Homer. When something that was perceived visually was described as *kalos*, the object would have either an outwardly attractive appearance or an outward appearance that would suggest the excellence of its inner quality. It falls under this latter case that Tyrtaios qualified a death in war or a war dead as *kalos*. He produced an image of a soldier who would 'fall and die while fighting on the front line', and described it as *kalos*, through which he advocated that such mode of dying was something more appealing and admirable than a young man in the flower of his youth.